

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-01

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No 7-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平成20年度京都府近代和風建築総合調査事業(受託)((1)②オ)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 窪寺茂
【スタッフ】 清水重敦、窪寺茂、栗野隆〔以上、文化遺産部〕、島田敏男、箱崎和久、黒坂貴裕、大林潤、番 光、高橋知奈津〔以上、都城発掘調査部〕、西田紀子〔企画調整部〕			
【年度実績概要】 本受託事業では、京都府内に所在する明治から昭和初期にかけて建設された文化財的価値を有する近代和風建築のうち、京都府近代和風建築総合調査委員会において選定された57件の物件につき、その歴史調査、実測調査、技法調査、写真撮影を実施し、配置図及び平面図の作成と文化財としての学術評価を行った。また、その成果を平成19年度に当研究所において実施した受託事業「平成19年度京都府近代和風建築総合調査事業」の成果と合わせて調査報告書の原稿としてまとめ、今年度の調査票と合わせて京都府教育委員会に提出した。報告書の出版業務は、京都府教育委員会による直接執行である。 調査では、京都市、宮津市、福知山市、亀岡市、南丹市、向日市、宇治市、京田辺市、木津川市、井手町、和束町、精華町の各市町村に所在する近代和風建築を現地調査した。建築類型の上では、住宅建築として町家、農家、邸宅、郊外住宅、集合住宅、寮を、宗教建築として寺院、神社を、商業建築として旅館、揚屋を、その他として町並みと、多岐にわたる対象を調査した。 調査の結果として、これまで不明瞭であった京都府における近代和風建築の現存状況と、建築類型の広がり幅が明らかになったこと、近代和風建築の技術の具体相が明らかとなったこと、近代和風建築に関わった施主、設計者、施工者の具体名が多数明らかとなり、近代京都における建築事情が解明されたこと、があげられる。京都府における近代和風建築は、質、両ともに関東周辺のそれと双璧をなす位置にあり、その具体相を解明した本調査は、京都府に留まらず、日本全体における近代和風建築の研究と保存に対して多大な貢献をなす成果を上げ得たものと考ええる。			
			
松殿山荘の建築（宇治市木幡） 本事業により京都府内の近代和風建築の多様さが具体的に示されたが、この建築は造形、規模、思想いずれをとっても他に類をみない独自性を持つ。			
【実績値】 調査票 150 枚、実測野帳 225 点、デジタル写真 7300 点、報告書原稿 687 ページ。			
【受託経費】 875千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所
業務実績書(受託事業)

処理番号 8000-02

研究所 No15-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京右京三条一坊八坪（第448次）の調査（受託）（(1)⑤ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【事業責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 林 正憲、難波洋三、馬場 基、高橋知奈津、鈴木智大〔以上、都城発掘調査部〕			
【年度実績概要】 本調査は平城京遷都1300年祭にともなう平城京歴史館（仮称）建設に際する事前調査である。調査面積は1100㎡で、調査期間は平成21年1月6日から3月25日（予定）である。 調査区中央において建築廃材等を大量に投棄した池を検出した。これは1929年に当該地に設けられた競馬場に関連する施設である可能性が高い。出土した廃材は、戦時中に存在していた興亜機械工業の建築廃材と考えられる。埋め立てたのは興亜機械工業接收後、基地施設を造営した米軍であろう。なお、この池はさらに西側に広がっていた昭和以降の大きな池を一部埋め立てて造られている。 したがって、調査区内で検出された奈良時代の遺構面は、調査区東側と北側にわずかに残されている状況であった。 東側では、L字状の溝とその周囲に広がる瓦溜まりを検出した。L字状の溝の内側では整地土が確認されるのみで、遺構等は検出されなかった。このことから、溝は基壇外装の抜取で、整地土上面に基壇建物が存在していたものと類推される。 北側でも瓦溜まりが検出されたが、東側に比べて土器の出土量が多いため、性格の異なるものと考えられる。遺構等で特に顕著なものはなかった。 出土した瓦から、今回検出した遺構面は奈良時代後半のものと考えられる。念のため、奈良時代前半の遺構面を探したが、検出されなかった。 なお、池の底からは弥生～古墳時代の流路が確認されている。			
【実績値】 林 正憲「平城京右京三条一坊八坪（第448次）の調査」『奈良文化財研究所紀要2009』			
【受託経費】 31,748千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-03

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No16-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	「平成 20 年度 大和紀伊平野農業水利事業（二期）団体営飛鳥 2 工区（縄手線）改修工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査（受託）（(1)⑤ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 豊島直博、黒坂貴裕、青木 敬、市 大樹、石田由紀子〔以上、都城発掘調査部〕、山崎 健〔埋蔵文化財センター〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【年度実績概要】 本調査は、近畿農政局による農業用水路の改修に伴う事前の発掘調査である。調査地は、奈良県橿原市縄手町の J A 橿原市鴨公支店駐車場内に位置し、藤原宮の内裏西官衙地区に相当する。発掘調査は、分水溝の新設区間の形状に合わせ、東西の最大幅 8 m、南北 20m、総面積は 62.5 m ² 、調査期間は 2008 年 12 月 1 日から 12 月 15 日までである。 調査区内では、藤原宮の造営に伴う整地土はすでに削平されていたが、弥生時代と古墳時代の土器を含む堆積土の上面で、溝 2 条と土坑 1 基を確認した。溝はいずれも東西方向に流れ、幅約 1.2m。北側の溝は後述する土坑によって壊されている。南側の溝は深さ約 30 cm である。2 本の溝は並行し、心々間距離は約 7 m である。過去の調査所見から、藤原宮の先行条坊、四条条間小路の道路側溝と考えられる。溝からは遺物が出土しなかった。土坑は東側部分が調査区外に続き、確認した大きさは東西約 3 m、南北 2.4m の楕円形、深さは約 50 cm である。中世の羽釜の破片が出土した。本調査区では、四条条間小路の両側溝を確認したものの、藤原宮に関連する建物跡は認められなかった。藤原宮内の西北部にあたり、建物の希薄な場所であることが判明した。宮内の建物配置や空間利用を知る上で、重要な成果が得られた。 また、上記発掘調査区周辺にて、2008 年 11 月 25 日から工事立会を行った。水路管の埋設経路に合わせて総延長約 110m、幅約 1.5m、総面積約 165 m ² が対象となったが、新設区間は総延長 30m で、その他は既設管の取り替えである。土層及びその年代については上記発掘調査所見と同様であり、立会において遺構は確認されなかった。 出土遺物は、コンテナ 2 箱程度で、瓦類、須恵器、土師器、弥生土器などがある。			
【実績値】 論文等数 1 件 豊島直博「内裏西官衙地区の調査－第 152-6 次」『奈良文化財研究所紀要 2009』2009. 6 出土品 軒瓦 1 点、丸平瓦 1 箱、土器 1 箱など 記録作成数 実測図 6 枚、写真（4×5） 4 枚			
【受託経費】 7 3 4 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-04

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No16-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡藤原宮跡（別所町南北水路）発掘調査（受託）（(1)⑤ア）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 木村理恵、丹羽崇史、箱崎和久、若杉智宏、加藤雅士〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【年度実績概要】 本調査は、農業用水路の改修工事に伴うものであり、橿原市教育委員会の委託を受けて実施した。調査地は、別所集落の北方を北流する水路と重複し、昨年度実施した第 149-10 次調査区から道路を隔てた南延長上に位置する。この地点は、藤原宮跡の東南部にあたり、朝堂院東地区とよばれ、官衙域が想定されている。 調査の結果、調査地の南部では、藤原宮南面大垣の柱穴 1 基、及び内濠・外濠を検出した。また、内濠のすぐ北側で、1 辺約 1.5m の掘形をもつ柱穴を検出しており、宮の南限施設の様相を知るうえでの手がかりが得られた。調査区は、長さ約 100m・幅約 2m、調査面積はおよそ 200 m ² である。調査期間は、2009 年 1 月 13 日～2 月 16 日。			
			
調査区全景（南東から）			
【実績値】 論文等数 1 件 木村理恵「朝堂院東地区の調査―第 152-7 次」『奈良文化財紀要 2009』2009. 6 出土品 軒瓦 1 点、丸平瓦 16 箱、土器類 5 箱、銭貨 2 点、など 記録作成数 遺構実測図 14 枚、写真（4×5）20 枚			
【受託経費】 3, 9 0 0 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-05

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No19-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	平城京跡 興福寺旧境内 (第 450 次) の調査 (受託) ((1) ⑤イ)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 加藤雅士、今井晃樹、大林潤、国武貞克、鈴木智大、渡辺晃宏 [以上、都城発掘調査部]			
【年度実績概要】 この調査は商業施設建設に伴うもので、調査地は平城京跡左京三条六坊十二・十三坪、興福寺旧境内 (果園・園地)、奈良町遺跡にあたる。調査面積は、東西約 10m 南北約 2m の約 20 m ² である。 調査の結果、北東の一部が現代の攪乱を受けている以外は、近世の包含層が良好な状態で残っていた。遺構は一部中世のものを含むが、多くは近世以降のものである。 検出した主な遺構としては、地山上で検出し鎌倉時代の土師器が出土した土坑 SK01、同じく地山上で検出した円形の柱穴と見られる土坑 SK03、下層包含層上面で検出した多量の炭・焼土が詰まり、近世の土器を含む廃棄土坑 SK04、上層包含層中で検出した甕を倒立させて埋めた水琴窟遺構とみられる SX01、上層包含層中で検出した落ち込み状遺構 SX02 などがある。 敷地内には調査の直前まで年代不明の町屋が空家の状態で建っていた。調査地はこの町屋の収益棟や主屋の土間部分に当たる。今回これに直接関係する遺構は確認できなかったが、廃棄土坑や水琴窟遺構など、町屋の暮らしを彷彿とさせる遺構や遺物の一端を明らかにすることができた。 なお、東六坊坊間東大路とその東西両側溝は、削平されたとみられ、確認できなかった。 特記すべき遺物には、廃棄土坑 SK02 から出土した底部外面に「市宅」と書かれた古代の墨書土器 A がある。			
			
全景 (東から)			
【実績値】 論文 加藤雅士「興福寺旧境内 (平城第 450 次) の調査」『奈良文化財研究所紀要 2009』(予定) 出土品 瓦磚類 8 箱、土器類 7 箱、焼土・金属類 1 箱 記録作成 実測図 1 枚、4 × 5 写真 3 枚			
【受託経費】 3 9 9 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-06

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No19-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	薬師寺(第451次)の調査(受託)((1)⑤イ)		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 林 正憲、難波洋三、馬場 基、高橋知奈津、鈴木智大〔以上、都城発掘調査部〕			
【年度実績概要】 本調査は平成20～22年度にわたる薬師寺防災施設敷設工事に伴う事前調査である。 今年度の敷設工事は基本的に既設配管沿いに行われるため、発掘調査は新規掘削部分においてのみ行うこととした。 具体的には、回廊南東隅の箇所と、若宮社西側の避雷針設置箇所である。調査面積は約6㎡である。回廊東南隅部分トレンチでは、既設の電線・水道管等のため、掘り下げができた部分は極めて狭いが、現地表下約1.4mで旧調査時遺構検出面を確認した。遺構は確認していない。若宮社西側トレンチでは、平安時代～現代の整地層を確認し、中世の礎石らしき石とその据え付け穴を現地表下約1.2mで、奈良時代の遺物包含層を現表下約1.8mで確認した。安全上の理由等によりそれ以上の掘り下げはできず、奈良時代の遺構は確認できなかった。			
			
【実績値】 出土品 瓦磚類4箱 土器類1箱 記録作成 実測図2 4×5写真6枚 論文 なし			
【受託経費】 195千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-07

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No20-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区檜隈寺跡周辺遺跡発掘調査 (受託) ((4) ②)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 関広尚世、石田由紀子、若杉智宏、次山 淳、小田裕樹、黒坂貴裕、市 大樹、豊島直博、青木 敬、箱崎和久、丹羽崇史、木村理恵 [以上、都城発掘調査部]、井上直夫、岡田 愛 [以上、企画調整部]			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部にあり、南東から北西に派生する丘陵上に位置する。この丘陵には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が所在する。今年度は、檜隈寺周辺における遺構の存在状況を確認するために、南北約 380m、東西約 150m の範囲に 12 カ所の調査区を設け、発掘調査を実施した。調査期間は、2008 年 7 月 1 日～2009 年 3 月 18 日。調査面積は、計 1630 m ² である。 第 1・2 調査区は、中世以降の耕作によって古代の遺構は大きく削平されていた。第 3 調査区では、谷地形を調査区壁面で確認し、檜隈寺講堂北側の平坦地がこれらの谷を埋め立てて造成されていることが判明した。第 4 調査区も、大部分が中世以降の耕作によって削平を受けていたが、調査区北端で人頭大の礫が落とし込まれた土坑 1 基を検出した。第 5 調査区では、耕作溝や瓦器の入るピット群と、掘立柱建物の東西 3 間×南北 2 間分、柵列 1 条を検出した。第 6 調査区では、調査区西側で耕作溝、調査区中央壁面で土坑 2 基を確認した。第 7 調査区も、中世の耕作による削平が著しく、調査区北東部で 3 基の柱穴を検出した他は、顕著な遺構は確認できなかった。第 8 調査区は、檜隈寺金堂西側にある南北道路により東区と西区に分かれる。東区内は、檜隈寺金堂の下成基壇の南西隅部分にあたるものの、基壇外装に用いられた玉石は抜き取られ、基壇も大部分が削平されていた。西区は、檜隈寺の回廊推定部分にあたるが、後世の削平が著しく、中世の掘立柱建物と塀が検出されたほかは、古代に関わる遺構は認められなかった。第 9 調査区では、土坑 4 基を確認し、第 10 調査区では、古代の溝 1 条と土坑 2 基を検出した。第 11・12 調査区では、中世の耕作による削平のため古代に関わる遺構は認められなかった。			
【実績値】 論文等数 1 件 関広・石田・若杉ほか「檜隈寺周辺の調査-第 155 次」『奈良文化財研究所紀要 2009』2009.6 出土遺物 軒瓦 37 点、丸・平瓦 111 箱、土器 10 箱、金属製品 37 点、石製品 9 点など 記録作成数 遺構実測図 133 枚、写真 (4×5) 75 枚			
【受託経費】 28,297 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-08

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No22-1

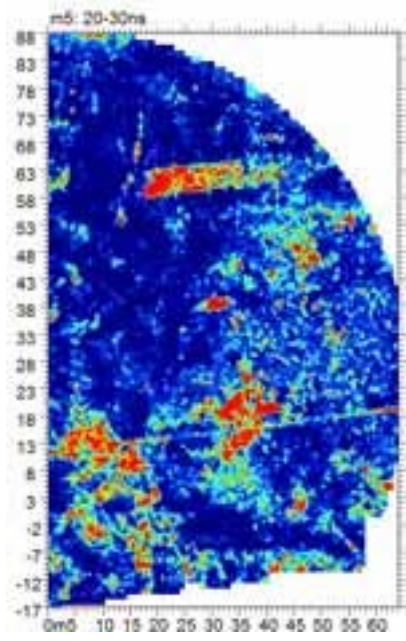
中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	琴ノ浦温山荘園庭園調査(受託)((1)⑤エ)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 内田和伸
【スタッフ】 小澤毅(考古学)[埋蔵文化財センター]、清水重敦(建築史)、栗野隆(庭園史)[以上、文化遺産部]、高橋知奈津(庭園史)[都城発掘調査部]、中村一郎(写真)[企画調整部]			
【年度実績概要】 本調査は、和歌山県海南市に所在する近代の和風庭園「琴ノ浦温山荘園」について、名勝として国指定を目指すための基礎的調査であり、財団法人琴ノ浦温山荘園から受託調査研究(単年度事業)として実施したものである。 調査対象は現在公開されている庭園部分(約48000㎡)とし、庭園の全体構成(主屋の東と西に展開する池泉庭等)及び細部意匠(池泉護岸、飛石技法等)、植栽(木本・草本類あわせて74種)、建築(3棟)、工作物類(門5棟、石灯籠21基、石塔2基等)について、その特徴を明らかにした。 また、財団法人琴ノ浦温山荘園が別途行っている地形測量の図面監修もあわせて実施し、地物(庭石・池泉、園路、植栽、建築等)の現地照合作業に基づく測量平面図の加筆・修正、庭園水面部分(約8700㎡)のレベル測量を実施した。測量平面図に関しては、縮尺別(1/100、1/400、1/800、1/1200)に全体調整を行った。あわせて、ニッタ株式会社及び財団法人琴ノ浦温山荘園に所蔵されている図書類、古写真、造営記録を中心とした資料整理を実施し、特に重要なものは大判写真撮影を行った。そして本庭園は黒江湾の海水を取水した「潮入の庭」であることから、国内の歴史的庭園における潮入の庭10例を収集し、立地・水源、水面の規模・構成に関して分析・考察を実施するとともに、温山荘園の造園史的な位置づけを行った。さらに本庭園にはモルタル製の擬石・擬木が池泉護岸や飛石、階段土留め、庭園家具等に異様なほどふんだんに使用されていることから、近代日本の庭園・公園におけるコンクリート利用の歴史、擬石・擬木を利用した近代の庭園・公園事例を収集し、温山荘園の造園史的な位置づけ・評価を行った。 以上の学術的な調査・研究を本調査では実施するとともに、本庭園の保存・活用に関して、管理活用体制、企画・展示・情報発信、維持管理・修理・修景、植栽管理などの点について、優先的に取り組んでいくべき課題と対応策を示した。 これらの成果は『琴ノ浦温山荘園庭園調査報告書』としてとりまとめた。			
			
			調査風景
【実績値】 調査面積(庭園): 約48000㎡ 調査棟数(建造物): 3棟 同定植栽種: 74種、調査工作物類(門5棟、石灯籠21基、石塔2基等) 監修図面: 1/100平面図45枚、1/400平面図1枚、1/800平面図1枚、1/1200平面図1枚 調査写真: 400カット、大判写真35カット 刊行図書数: 1件 (財団法人琴ノ浦温山荘園『琴ノ浦温山荘園庭園調査報告書』2009. 3)			
【受託経費】 1,880千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所
業務実績書(受託事業)

処理番号 8000-09

研究所 No30-1

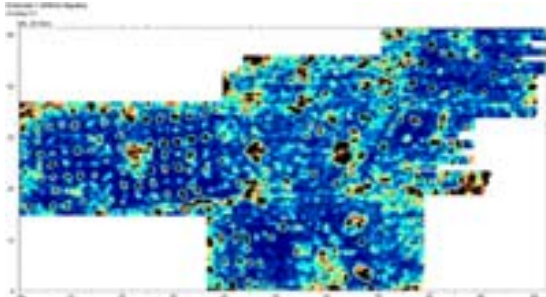
中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	胡桃館遺跡詳細分布調査(受託)((2)③イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】 小澤毅[埋蔵文化財センター]、西村康、西口和彦[以上、奈文研客員研究員]			
【年度実績概要】 胡桃館遺跡は平安時代の集落遺跡として著名であり、特に十和田火山灰の土石流による埋没家屋の存在は、全国的に注目されている。 北秋田市教育委員会は、本研究所と連携して、出土文字資料及び建築部材の調査を実施してきた。しかし、遺跡の範囲や遺構配置が不明なため、今回、物理探査手法を用いた探査を実施することになった。探査を要する範囲はきわめて広大であり、複数年の実施が予定されている。 20年度は、2回の現地作業を実施した。まず7月は、遺跡の中心部分と考えられている水田が耕作のため探査ができない状況にあり、本遺跡の探査に有効な方法の検討と、すでに遺構が明らかになっている箇所における反応の検討を主眼として、既調査地および野球場の探査を行った。この結果、既調査地の反射は発掘の影響もあり明瞭ではないが、野球場からは平面方形の反射が3ヵ所存在することが注目された。このうちの2ヵ所は隣接して一列に並んでおり、規模のうえからも埋没家屋の可能性が指摘できる。あわせて、探査手法としては GPR(地中レーダ)が有効であることが判明した。 11月の調査では、水田部分の探査を行い、複数の異常を明らかにすることができた。これらは方形の平面をもつもので、聞き取り調査による木材の出土地点に近いことが注目される。今後、これらの成果をさらに分析したのち、確認調査を行って、成果の検証と遺跡範囲や遺構配置の検討に進みたい。			
			
			レーダ探査成果(A地点)
【実績値】 探査面積：12,974 m ² 探査地点：9 地点 概要報告作成：1 件			
【受託経費】 2,077 千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所
業務実績書(受託事業)

処理番号 8000-10

研究所 No30-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	福岡県筑紫郡那珂川町安徳台遺跡群のレーダー及び磁気探査(受託)((2)③イ)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	主任研究員 金田明大
【スタッフ】 小澤毅[埋蔵文化財センター]、西村康、西口和彦[以上、奈文研客員研究員]			
【年度実績概要】 安徳台遺跡(福岡県)は、弥生時代から中世にいたる集落・墓地・居館が確認されている複合遺跡である。なかでも弥生時代の大型甕棺・竪穴建物の存在で著名であるが、その範囲と詳細な遺構配置の把握が課題となっていた。 史跡の整備を視野に入れ、安徳台遺跡の保護を進めてきた那珂川町教育委員会の委託を受けて、このたび奈良文化財研究所埋蔵文化財センターでは安徳台遺跡の総合探査を実施した。 その結果、本年度探査した4地点のうち、1地点で甕棺の範囲を推定することができた。また、2地点で直線的に並ぶ遺構と考えられる異常部を認め、データの検討により、その形状から甕棺の埋納や住居の存在の可能性があることを指摘した。そして、これらの成果を受けて那珂川町が実施した試掘調査により、竪穴住居を異常部に確認することができた。この結果、安徳台及びその周辺における遺構の詳細探査が、今回の手段で可能であることが判明した。 安徳台遺跡は広大な範囲に広がることが推定されており、今回、探査の有効性が確認されたことで、今後も他地点を含めた探査事業の継続を予定している。			
			
安徳台 GPR 探査成果(Ⅲ 地点)			
【実績値】 探査面積： 18,246 m ² 探査地点： 4 地点 概要報告作成： 1 件			
【受託経費】 997 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-11

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No31-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	伏見稲荷大社奥宮の年輪年代調査(受託)((2)④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	年代学研究室長 肥塚隆保
【スタッフ】 大河内隆之〔埋蔵文化財センター〕			
【年度実績概要】 伏見稲荷大社奥宮の解体修理に際し、社殿造営の経緯を明らかにすべく、年輪年代法による調査を実施した。この調査では、伏見稲荷大社奥宮に使用されている建築部材の中から年輪数が約100層以上あると思われる化粧裏板9点を選定し、調査対象を奈良文化財研究所に輸送したうえで、マイクロフォーカスX線CTを用いて実施した。年輪幅の計測は、調査担当者らが開発した年輪画像計測ソフトウェアを用い、年輪年代測定は、主に近畿地方の建造物や考古資料などのデータを基に作成された暦年代の確定しているヒノキの標準パターンと照合することで行った。 年輪年代調査を実施した9点の化粧裏板のうち、8点の年輪年代が確定した。それら8点の化粧裏板には、辺材の一部が残存するもの(以下、辺材型と称する)4点、辺材部を欠く心材のみのもの(以下、心材型と称する)4点が含まれていた。 辺材型の化粧裏板4点から1580年から1593年にかけての年代が得られたことにより、伏見稲荷大社奥宮の化粧裏板の原木伐採の時期は、1593年を上限とする16世紀末ないし17世紀初頭頃と考えられる。また、年輪年代の確定した8点の化粧裏板のうち、少なくとも6点については、相互の年輪データの相関性がきわめて強いことから、それぞれ同一の原木に由来する蓋然性が高い。ゆえに、今回調査対象とした化粧裏板の用材調達は、一括のものであると考えられる。 以上の年輪年代調査により、伏見稲荷大社奥宮では、1593年を上限とする16世紀末ないし17世紀初頭頃に、化粧裏板に手を加えるような大規模な造営が行われたことが明らかになった。ただし、この造営が、奥宮現社殿の建立であったのか、あるいは既存社殿の修理であったのかは、化粧裏板以外の建築部材の年輪年代情報が得られていないため、今回の調査結果からは判断することができない。			
【実績値】 大河内隆之「伏見稲荷大社奥宮の年輪年代調査」『伏見稲荷大社奥宮修理工事報告書』伏見稲荷大社、2008			
【受託経費】 208千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-12

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No32-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	東名遺跡出土動物遺存体調査（受託）((2) ⑤)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長 松井 章
【スタッフ】 丸山真史〔京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程〕、永井理恵〔京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程〕			
【年度実績概要】 本年度の分析は、第一、第二貝塚出土の動物遺存体、破片数で 5,404 点にのぼる。そのうち種名と部位名まで同定できたのは、魚類 597 点、爬虫類 325 点、鳥類 15 点、哺乳類 2,337 点の計 3,274 点で、約 90% がイノシシとニホンジカが圧倒的多数を占める。そのほかにスズキ、ボラ科、スッポンなど、計 39 種類を同定することができた。 出土部位で最も多いのは鹿角である。鹿角は骨角器の素材として多用され、今回、いくつかの新知見を得ることができた。なかでも直径 1 mm ほどの細かな穴を多数連ね、幾何学紋様を施した装身具はこれまで知られておらず、縄文時代早期として、ほかに類を見ない優品である。以下に本遺跡の鹿角の加工技術について報告する。 東名遺跡では、完形の鹿角も出土するが、多くは骨角器の素材を取るために割られ、なかでも枝角の分岐部が多い。加工痕には擦り切りと打ち割りの 2 種類があり、擦り切りは断面 U 字型もしくはその一部で、表面に微細な線状痕が多数観察できる。打ち割りは、鹿角の表面を連続して加撃し、整形したものである。なお、いずれの場合でも、加工部が髄（海綿状組織）に及ぶと、そこで折り取っている。 鹿角破片の形状と、その加工痕を観察した結果、素材として枝角の分岐部の幅広い部分を用い、その内外面の加工を同時に行ってから半截したことを明らかにできた。また、同様の素材から加工した例が複数あり、素材の選択から、整形、細部加工の工程に規則性が存在したことも判明した。 このほか、角座の裏面（前頭骨側）の残存状態から、約半数の出土例が落角を素材としていたことがわかった。鹿角の弾力性はそこに含まれる脂肪やタンパク質によるもので、落角となり風化が進むと、それらが急速に脱落して枯れ角状態となり、割れやすくなる。そのため、晩冬から春先の落角の季節には、意図的に落角の採集が行われたことを明らかにできた。			
			
鹿角製装飾品（径 1 mm 程の列点文で幾何学的な文様を描く）			
【実績値】 同定及び計測を行い分析した動物骨： 5,404 点			
【受託経費】 1,530 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-13

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No37-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復業務委託（受託）（（3）④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]			
【年度実績概要】 長野県社宮司遺跡より出土した六角木幢の5ヵ年にわたる保存処理研究受託事業の最終年度である。この六角木幢は全国でも出土例がなく、宝珠、笠、幢身、風招・風鐸に用いられている材は樹種が異なっている。また、幢身には、彩色を失いつつも仏画がわずかな凸線として残存している。保存処理指導委員会では、この六角木幢を真空凍結乾燥法により保存処理することが決定され、保存処理が本研究所に委託された。本年度は、六角木幢の真空凍結乾燥処理をすべて終了し、すべての遺物を返却した。また、5ヵ年にわたる保存処理研究について報告書を作成した。			
			
六角木幢の宝珠部分（保存処理後）			
【実績値】 報告書作成： 1 件			
【受託経費】 5 0 0 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-14

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No37-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	秋田県漆下遺跡出土漆関連遺物分析調査(受託)((3)④)		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】	降幡順子 [都@城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]		
【年度実績概要】	秋田県漆下遺跡より出土した土器には、漆と思われる暗褐色ないし黒色の物質が付着ないしは塊状に残存している。これらの漆に関連すると思われる遺物について、縄文時代の漆工技術の一端を明らかにすることを目的に、種々の調査分析を行った。本年度は2ヵ年にわたる受託研究の第2年度であり、FT-IR 分析と顕微鏡観察を実施した。その結果、FT-IR 分析におけるクロロホルムへの溶解性の違いから、漆関連遺物に付着している物質が、漆のみ、アスファルトのみ、漆とアスファルトの混合物の3種に分かれることが明らかとなった。今後、アスファルトをどのように混合させたのかなどについて検討をおこなう必要がある。 漆下遺跡出土黒色物質のFT-IR 分析		
【実績値】	報告書作成： 1 件		
【受託経費】	530 千円		

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

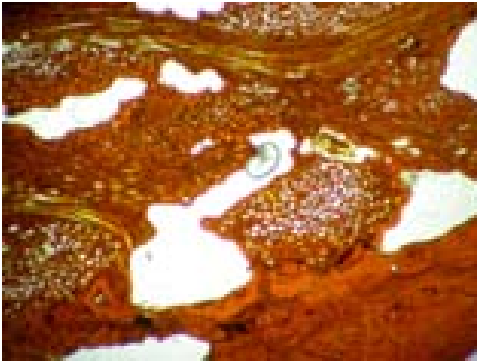
処理番号

8000-15

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No37-3

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	重要文化財奈良県黒塚古墳出土品事前調査並びに保存修理（受託）（（3）④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]			
【年度実績概要】 奈良県黒塚古墳より出土した遺物は、国の重要文化財に指定されている。このうち、青銅鏡についてはすでに保存処理が終了しているが、鉄製品についてはまだ保存修理がなされていない。奈良文化財研究所では平成19年度から同古墳出土の鉄製品の事前調査並びに保存修理を受託している。保存修理に際しての事前調査では、X線CTスキャンから、サビで塊状となった状態で刀剣類の残存状況を明らかにした。また、実体顕微鏡観察やX線CR法による透過撮影像から、多くの遺物の表面に布などの繊維製品の痕跡が存在することが明らかとなり、これらの痕跡について詳細な調査を進めた。その結果、それぞれの繊維について、撚糸、織構造、漆塗装などの材質的特徴と構造的特徴に関する知見が得られ、ヤリの刃部の結索の技法、剣の柄の布の巻き方などを明らかにすることができた。保存修理にあたっては、これらの繊維痕跡の情報を欠失しないよう、実体顕微鏡下において慎重にクリーニングを実施し、アクリル樹脂含浸などにより安定化を図った。			
			
剣の柄に巻かれている繊維痕跡の断面顕微鏡写真			
【実績値】 報告書作成： 1件			
【受託経費】 18,000千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

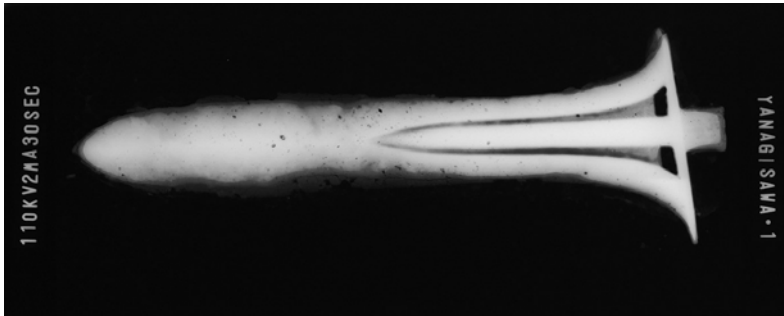
処理番号

8000-16

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No37-4

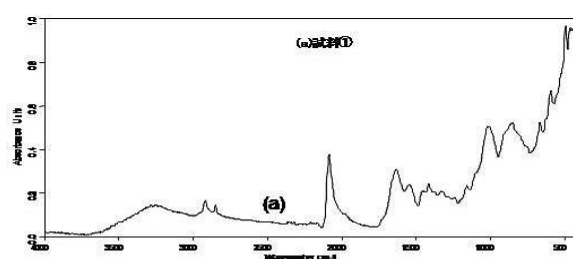
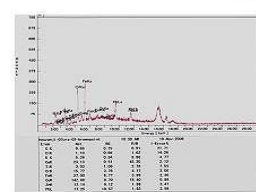
中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	長野県中野市柳沢遺跡出土の青銅器保存修復業務委託（受託）（（3）④）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]			
【年度実績概要】 長野県中野市柳沢遺跡は、銅戈7本が埋納状態で発見されるという、全国でもきわめて類例の少ない遺跡である。同遺跡では、これらの銅戈に加え、銅鐸も出土している。銅戈は大阪湾型が6本に九州型が1本という構成で、特に中国地方よりも東で九州型の銅戈が出土した例としては初めてである。奈良文化財研究所では、これらの銅戈・銅鐸を良好な状態で保存するため、種々の事前調査を通じて、適切な保存修理を行うための受託研究を実施している。20年度は、銅戈3本について事前調査と保存修理を行った。銅戈の事前調査では、X線CTスキャン、X線透過撮影、蛍光X線元素分析、精密化学分析を行い、遺物の現状・材質を詳細に調査した。そして、これらの調査結果に基づいて適切な保存修理を策定し、保存修理を実施した。事前調査及び保存修理に関する経過並びに成果については、本年度の年度実績報告書を作成し、報告を行った。			
			
柳沢遺跡出土1号銅戈のX線透過撮影像			
【実績値】 報告書作成： 1件			
【受託経費】 3,900千円			

【受託】
(様式3)

施設名 奈良文化財研究所
業務実績書(受託事業)

処理番号 8000-17

研究所 No37-5

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	宝山寺獅子閣材料分析調査(受託)((3)(4))		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子 [都城発掘調査部]、脇谷草一郎 [企画調整部]			
【年度実績概要】 宝山寺獅子閣は、明治17年以来、宝山寺の客殿として利用されてきた「擬洋風」の建造物であり、国の重要文化財に指定されている。このたび、平成17年度より5年計画で、基盤の歪みと壁面のひび割れなどを是正するための解体修理が行われている。解体修理にあたっては、建立当初の形態に復旧させるため、さまざまな材料の分析が必要となる。奈良文化財研究所は、この材料分析を奈良県から委託された。そして、クロスの下貼りに用いられた紙、クロス、床板などの塗装、壁の仕上げなど多くの材料に関する分析を行い、明治当初の建築に用いられた材料について、多くの知見を得ることができた。			
   宝山寺のクロス下貼り			
【実績値】 報告書作成： 1件			
【受託経費】 500千円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-18

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No42-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務 ((4) ①)		
【担当部課】	保存修復科学センター (東文研)	【事業責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、早川泰弘、木川りか、吉田直人、犬塚将英、間渕 創、川野辺 渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人、坪倉早智子 (以上、東文研)			
【年度実績概要】 高松塚古墳は平成 19 年に解体が行われ、現在壁画は保存修理施設において保管されている。そして古墳壁画を取り巻く温湿度環境が適切に保たれているかを監視するために、温湿度測定を継続してきた。さらに今年度は、春と秋の二度にわたり、保存修理施設の一般公開が行われた。来場者の数は合計で約 9000 人であったが、一般公開期間中も古墳壁画を取り巻く温湿度環境に影響がなかったことを測定結果から確認した。また、壁画のみならず、見学通路における二酸化炭素の濃度測定も行い、来場者の方々にとって安全な環境で見学して頂いたことも確認した。 高松塚古墳壁画の劣化要因の解明のために墳丘部の地震解析を行い、墳丘部の割れ目が地震により生ずる過程のシミュレーションを行った。 石室解体中に採取した試料について微生物の分離と同定を行った。次年度の近辺土壌の微生物の解析とあわせて石室の微生物との関連を調査する予定である。また、石室や取り合い部でこれまで使用された履歴のある樹脂などの材料について、石室から分離された主要なカビの生育の度合いを調査した。また、殺菌処置に使用された薬剤が薄まったときに微生物に及ぼす影響や、分離された微生物が漆喰の成分である炭酸カルシウムに及ぼす影響についても検討中である。壁画の修復が行われている施設の浮遊菌調査や、虫についても必要に応じて調査を行った。 昨年度に引き続き、壁画の状態記録のため損傷図面を作成した。天 3、東女子については昨年度中に完成しており、今年度は残りの 9 面全 63 項目中、45 項目の図面を完成させた。壁画の処置方法について模擬壁にてテストを行い、布海苔水溶液による漆喰の強化、次亜塩素酸ナトリウム水溶液を用いたバイオフィルムによる汚れのクリーニング方法などを確立した。今年度は、天 3 については漆喰層の 1 度目の強化を終了、バイオフィルムの漂白と漆喰層の 2 度目の強化を行っている。東女子については漆喰層の 1 度目の強化を終了した。天 4 については漆喰層表面を被っている樹脂膜の除去を行っている。			
【実績値】			
【受託経費】 54,213,821 円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-19

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No42-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査 ((4) ①)		
【担当部課】	保存修復科学センター (東文研)	【事業責任者】	保存修復科学センター長 石崎武志
【スタッフ】 佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、間渕 創、川野辺 渉、中山俊介、北野信彦、早川典子、森井順之、加藤雅人、坪倉早智子 (以上、東文研)			
【年度実績概要】 小前室の空調設定を 11℃として連続運転している。石室内は 95%RH 以上、小前室は 90%RH 以上という高湿度に保たれている。土壌水分計の更新(平成 20 年 6 月 6-7 日)とその後の動作を監視したが、特に問題は生じていない。その他センサー類(雨量計、風向風速計、温度湿度センサー数点)の更新は平成 21 年 3 月に行った。空調系ポンプからの漏水が数回起こり、更新について助言した。小前室内の追加の樹脂施工、墳丘シート掛け増し工事が 1 月 29-30 日にあり、技術的な助言と作業管理を担当した。 平成 20 年 6 月に石室内の微生物調査を実施した。8 箇所のサンプルから菌類約 80 株が分離されたが、今回石室内で新たに検出された属は見当たらなかった。バクテリアについては、8 箇所のうち、3 箇所のサンプルから酢酸菌の一種が分離、同定された。この種類のバクテリアは酢酸を産生し、炭酸カルシウムを溶解する可能性があることから、漆喰への影響が懸念された。殺菌剤の一部については、分解産物が栄養源になる可能性なども考慮し、現在は物理的な除去と局所的な殺菌に限定して処置を行い、経過を観察した。平成 20 年に天井天文図の取り外し・保護が完了した現在、今後の点検方法については新たな検討を要する時期にきている。また、浮遊菌調査結果をふまえ、施設内の清浄度管理のため、除菌清掃などを実施した。 4 月に「月像」を剥ぎ取り、11 月にはすべての天文図の剥ぎ取りを完了して天井無地部分の剥ぎ取りに着手し、北壁の一部も剥ぎ取った。石室内の点検及びカビ処置も定期的に行った。これまでに取り外した漆喰片については随時経過観察と処置を行っている。「子・丑・寅」については平成 20 年 5 月の公開のための額装を完成させ、平成 21 年度の公開に向けて「青龍」の処置を行った。また、剥ぎ取った天文図漆喰片の適切な処置方法を検討するために模擬漆喰を作成して実験を行い、作業台の検討なども行った。今後の無地部分の剥ぎ取りのための治具の改良も行った。			
【実績値】			
【受託経費】 41, 222, 272 円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-20

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No43-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務(受託)((4)①)		
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【事業責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 松村恵司、廣瀬覚、番光、木村理恵、降幡順子〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、岡田愛〔以上、企画調整部〕、水野敏典〔奈良県立橿原考古学研究所〕、相原嘉之〔明日香村教育委員会〕			
【年度実績概要】 平成 18～19 年度にかけて実施した高松塚古墳石室解体に伴う発掘調査の成果及び出土資料の整理作業を進めるとともに、高松塚古墳仮整備に伴う発掘調査を実施した。 石室解体に伴う発掘調査の整理作業に関しては、図面・写真類を整理するとともに、取り外し漆喰や切り取り版築の台帳登録、データベース作成などを行い、概要を報告した。また、発掘成果を一般向けに普及公開する目的で、パンフレットを編集発行した。さらに、石室解体に伴う発掘調査時に撮影した記録ビデオの編集作業を進めた。出土資料の保存処理作業として、版築層サンプルの樹脂強化作業、石室周囲で捕獲したムシ類のアルコール液浸作業、発掘時に型取りした地震痕跡の模型作成を実施した。 仮整備に伴う発掘調査は、2008 年 7 月 1 日より開始し、2009 年 2 月 13 日まで実施した。調査面積 360 m ² 。古墳の南西部では、地滑り及び後世の水田耕作時に既に当初の墳丘の形状が失われていたものの、南東部では、明瞭に残存する墳丘裾の版築層及びそれを取りまく周溝を検出した。その結果、従来通り、直径 23m の円墳とする復元案の妥当性を追認した。また、墳丘南斜面には、古墳中軸線を挟んで東西 4 m の対称の位置で 2 条の石詰め暗渠排水溝を検出した。さらに、墳丘南～南西にかけては、大規模に谷を埋め立て墳丘基盤面の整備を行っている状況も明らかとなった。 以上の調査成果により、仮整備にむけて必要となる墳丘に対する正確な情報が得られるとともに、暗渠排水溝の設置や墳丘構築以前の基盤面造成のあり方が明らかになり、高松塚古墳の構築過程を復原するうえで重要な成果が得られた。			
【実績値】 論文等数 2 件 ①松村恵司・廣瀬覚「高松塚古墳の調査―第 154 次」『奈良文化財研究所紀要 2009』2009. 6 ②松村・廣瀬・岡林・相原「高松塚古墳の石室解体に伴う発掘調査」『日本考古学』第 27 号 日本考古学協会 2009. 5 出土品 土器片コンテナ 5 箱 瓦 24 点(平瓦 17 点、丸瓦 7 点) 記録作成 実測図 85 枚 写真(4×5) 132 枚			
【受託経費】 1 3 7, 2 6 5 千円(契約額)			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-21

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No43-2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務（受託）（(4)①）		
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【事業責任者】	都城発掘調査部長 松村恵司
【スタッフ】 玉田芳英、石田由紀子、豊島直博、降幡順子〔以上、都城発掘調査部〕、井上直夫、中村一郎、岡田 愛〔以上、企画調整部〕			
【年度実績概要】 都城発掘調査部では、特別史跡キトラ古墳の石室内外より発掘調査によって出土した遺物に対して、分析と保存処理及び展示活用のための作業を実施した。このうち、石室内出土の琥珀玉に関しては、産地等の分析を引き続き進めるとともに、保存修復を行った。2007年度に制作した銀装大刀復元品を、飛鳥資料館特別展『キトラ古墳壁画 十二支子・丑・寅』において展示公開した。また、保存処理の完了した石室石材について接合・修復作業を行い、石室南壁の欠損部分として復元した。本資料は、仮設保護覆屋内で管理され一般には見ることのできない石室の実物資料として展示活用材料となるものと考えられ、報道発表後、藤原宮跡資料室において公開した。 また、フォトマップデータに基づくブルーレイハイビジョンディスク動画、ショートバージョン（10分）、ロングバージョン（50分）の2種類を製作した。			
【実績値】 制作物 1件 ① 奈良文化財研究所『ブルーレイハイビジョンディスク キトラ古墳壁画 2004』2009.3 論文等数 1件 ① 豊島直博「キトラ古墳出土銀装大刀の復元品」『奈文研ニュース』30 2008.9 報道発表 2件 ① 「キトラ古墳出土銀装大刀の復元品製作について」2008.4 ② 「キトラ古墳出土の石室石材の復元」2009.2			
【受託経費】 27,701千円（契約額）			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-22

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No44-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	諸外国における文化財輸出規制を規定した法令に関する調査 ((1) ①)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】 二神葉子、今井健一朗（以上、文化遺産国際協力センター）			
【年度実績概要】 日本の文化財保護法では、国宝を含む重要文化財の輸出は、展覧会への出品等一時的なものを除いて原則禁止されており、また、登録文化財では国への届出が必要である。しかし、国指定文化財以外には輸出規制は設けられておらず、未指定の文化財が競売にかけられる等の問題が発生している。そこで、諸外国での同様の事例に対する対応を知るため、平成20年12月～平成21年3月に、特に文化財保護制度が発達しており、また、多くの文化財を有する調査対象各国（イギリス、ドイツ、フランス、イタリア、中国、韓国、アメリカ）の文化財保護に関する主要な法令の条文について、文化財の輸出規制に関する調査を実施した。 法律上の文化財の定義に基づき文化財とみなされるもののうち、政府によって「指定」「登録」などの認定行為がなされた文化財について、他と区別した扱いがなされることとなる。そして、これらの文化財の輸出は、今回の調査対象の各国とも原則禁止とされている。 しかし、これ以外の未指定の文化財については、緊急指定の規定は、損傷を防止するための手段としては存在するものの、緊急的な輸出差し止めの規制が存在する国は限られている。指定という行為が特定の限定された文化財に対して特別な扱いをするために行われている以上、「未指定」文化財に対する規制は存在しないのが通常である。ただし、韓国の文化財保護法には、未指定の文化財に関しても原則輸出禁止をうたっており、一般文化財と誤認されるおそれのある物品を輸出する際には文化財庁長の確認を必要とするとの規定がある。このように、すべての文化財の輸出について規制をかけることを可能としているが、実際の運用は困難と思われ、運用の実態についてさらに調査する必要があると思われる。 なお、輸出規制に関して規定した基本的な法令に関する調査項目についてそれぞれまとめた国別の比較表、概要の解説、および法令の条文の和訳をあわせて報告書とした。			
【実績値】 報告書「諸外国における文化財輸出規制を規定した法令に関する調査 報告書」			
【受託経費】 729,985 円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-23

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No47-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業 ((1) ②イ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田 健
【スタッフ】 杉崎佐保恵 (文化遺産国際協力センター)			
【年度実績概要】 本事業は、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団からの受託による。 1) 最終年度作業実施についての打合せと現場視察 4月23、24日の日程で西安市を訪れ、陝西省文物局、西安文物保護修復センター他の担当者と事業最終年度の作業実施について打合せと橋陵の修復作業現場の視察を実施した。事業対象である順陵、乾陵、橋陵での作業を完了させること。中国側によって報告書を作成すること。石彫像の保護修復に関するシンポジウムを開催すること。国家文物局及び財団への報告のための総括評価委員会を開催することが確認された。 2) 唐陵石彫像保護修理事業指導委員会・専門家委員会の開催 6月21日から24日の日程で、西安市において第4回目の指導委員会・専門家委員会を開催した。日本からは専門委員として西浦忠輝(国土舘大学教授)、根立研介(京都大学教授)のほか、清水真一(文化遺産国際協力センター長)、岡田健が出席した。 会議では、2007年度に実施した橋陵、順陵での考古調査、橋陵、順陵での環境整備作業の進展状況、橋陵、順陵での石像修復作業、5.12四川地震で影響を受けた順陵での基盤沈下と亀裂の観測について報告がなされ、委員から高い評価が得られた。橋陵の修復整備作業現場を視察した。 3) 作業の進捗状況 2007年度は乾陵、順陵での修復作業が順調に進められ、2008年度の完成を目指している。報告書は、中国側が担当し、2009年度内に刊行される予定となっている。 4) 事業完了評価委員会の開催 3月16日から18日の日程で、西安市において事業完了の総括と評価の委員会を開催した。 本事業は、日本から提供の申し出があった資金を活用し、中国側各機関の参加のもと、順調に作業を進めてきた。考古学調査を十分に行之、各陵墓、各門の石彫像の当初の状態を復元的に考察し、それを根拠とした整備作業と修理作業を実施した。これまで石彫像の保護は、亀裂の修復や表面の風化防止処理といった対処療法のみで終わっていたが、このような総合的な保護修理事業を実現できたことに関して、中国側担当者は自信を深め、また専門委員会、陝西省文物局、国家文物局も高い評価を与えている。			
【実績値】			
【受託経費】 1,245,200 円 (うち間接経費 113,200 円)			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-24

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No47-2

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	龍門石窟保護修復プロジェクト ((1) ②イ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田 健
【スタッフ】 清水真一 (文化遺産国際協力センター)、石崎武志 (保存科学修復センター)、津田 豊 ((株)ジオレスト)、中田英史 ((有)ウッドサークル)、西浦忠輝 (国士舘大学)			
【年度実績概要】 ユネスコ/日本信託基金によって 2001 年 11 月から開始された中国龍門石窟保護修復プロジェクトに、ユネスコのコンサルタント兼プロジェクト専門家として参加している。 1) 第 7 年目契約 2007 年 7 月から 2008 年 3 月 31 日を期間として結んだ第 6 年目の契約が終了した段階で、2008 年 9 月までの工期を残しているにもかかわらず、当初計画案においてコンサルタント用に準備された経費がなくなってしまった。このため、ユネスコ北京事務所が経費内から資金を調達するまでの間、実質の作業ができなくなった。第 7 年目の契約は、結局 9 月から 2009 年 2 月までを目途として結ばれたが、2009 年 2 月に総括の三者会議とシンポジウムを開催することにしたため、3 月までの延長手続きを行った。 2) 専門家会議の実施 11 月 13 日から 15 日の日程で洛陽市で開催される専門家会議に出席し、作業完了に向けての点検と協議を行った。会議では、潜溪寺洞上部で実施した防水処理作業について修正点を指摘し、施工業者に指導を行った。事業完了を記念するシンポジウムをクムトラ石窟保護修理事業と合同で実施することが決まった。 3) 最終専門家会議・日中政府ユネスコ三者会議 2 月 20 日に北京市中国文化遺産研究院で日中専門家会議を開いて事業最終の総括と報告作成を行い、同日開催された日中政府ユネスコ三者会議で報告させた。 4) 事業完了記念シンポジウム 2 月 21 日に同研究院講堂で、事業完了記念シンポジウムを開催した。			
【実績値】 シンポジウムでの発表 (岡田健、津田豊)			
【受託経費】 15,300USD			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-25

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No49-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存修復事業 ((1)②ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 清水真一、山内和也、宇野朋子、有村 誠、影山悦子、邊牟木尚美、島津美子、鈴木 環、廣野 幸（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、谷口陽子、西山伸一、岩井俊平（以上、客員研究員）、井上和人、窪寺 茂、森本 晋、石村 智、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力センターは、2004 年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保存事業に参画し、バーミヤーンの文化遺産保護のために様々な活動を行ってきた。アフガニスタン国内の治安悪化を考慮し、本年度は日本国内においてアフガニスタンの考古学専門家の人材育成・技術移転、バーミヤーン仏教石窟出土の樺皮文書の保存修復及び専門家の人材育成・技術移転を実施した。 ①考古学専門家の人材育成・技術移転 アフガニスタン考古学研究所より研究員 1 名を招へいし、7/18～12/22 にかけて、東京文化財研究所（7/18～9/12、12/15～12/22）、流山市教育委員会（8/25～8/28）、奈良文化財研究所（9/16～12/12）において研修を実施した。研修では、フィールド調査に必要な発掘、測量の方法や最新の機器の使用法、また発掘後の室内作業として、遺物の実測、拓本、インクトレースによる製図などが指導された。それぞれの機関で、共通した研修内容を繰り返し指導することができたので、研修生の研修内容に対する理解と習熟度は高かった。研修の最後には、アフガニスタンの考古学事情や研修内容を発表する報告会「アフガニスタン人考古学専門家による研修成果発表会」を実施した。 ②バーミヤーン仏教石窟出土の樺皮文書の保存修復及び専門家の人材育成・技術移転 バーミヤーン仏教石窟から出土した樺皮仏典断片 600 点あまりを東京文化財研究所に移送し、仏典の保存修復処置を行った。あわせて、カーブル博物館より職員 2 名を招へいし、11/13～1/30 にかけて、文書の保存修復とそれに関わる基礎的な技術や知識に関する研修を実施した。仏典断片はそれぞれ延展処置後、スライドガラスにマウントし、特製の保存ケースに収納した。研修終了にあたり、「バーミヤーン仏教石窟出土の樺皮仏典の保存修復」を開催し、研修内容の報告を行なった。なお、研修生の帰国にあわせて保存修復処置を終えた全ての仏典断片をカーブル博物館に返還した。			
【実績値】 報告会 2 回：「アフガニスタン人考古学専門家による研修成果発表会」（08.12.17）、「バーミヤーン仏教石窟出土の樺皮仏典の保存修復」（09.01.19） 報告書 1 件：Report on the Training Programme for the UNESCO Japanese Funds-in-Trust Project "Safeguarding of the Bamiyan Site 2008" (①)			
【受託経費】 70,000USD（間接経費 15%含む）			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-26

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No49-2

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業 ((1) ②ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】 山内和也、有村 誠 (以上、文化遺産国際協力センター)、西山伸一、津村宏臣 (以上、客員研究員)			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力センターは、2006 年より、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存事業」プロジェクトに参加してきた。これまで、保存修復に先立って必要な遺跡のクリーニングや遺跡範囲を確認する試掘などの考古学調査を実施してきた。本年度は、(ストウーパのある中庭に面した) 塔院区南東の壁の精査と仏教寺院の外壁を確認するための試掘調査を実施した。また、アジナ・テパの立地や周辺遺跡との関連性を明らかにするために、周辺の考古学的な踏査も実施した。 ①塔院区南東の壁の精査 塔院区南東の壁は、涅槃仏が発見された部屋の前に位置し、その一部は 2007 年度の調査で確認されていた。今回の調査では、より広範囲にこの壁を検出する作業を行った。その結果、中庭と涅槃仏の部屋をつなぐ入口と中庭に面した壁に付属するベンチ状の遺構が確認された。 ②仏教寺院の外壁を確認するための試掘調査 これまで調査によって北側と東側において外壁が確認されている。本年度は、遺跡の東側と西側にあらたに調査区をもうけて試掘を行った。その結果、それぞれの調査区で、練り土 (パフサ) で構築された壁を確認した。これまでの調査によって、アジナ・テパの仏教寺院は独立した周壁がめぐるのでなく、寺院建築そのものが外壁の役割を果たしていたことが明らかとなった。こうして考古学調査に得られた情報は、寺院本来の姿に近づけて遺跡を保存整備する際に重要な指針となる。 ③遺跡周辺の考古学的な踏査 アジナ・テパ遺跡の周辺にどのような遺跡が存在するのか確認するために考古学的な踏査を実施した。遺跡周辺には、チョルグル・テパや「殉教者墓 (シャヒードボボ)」と呼ばれるイスラーム時代の遺跡や塚がいくつか確認されたが、アジナ・テパ遺跡と同時代と考えられる 7～8 世紀に位置づけられる遺跡については、確認されなかった。			
【実績値】 報告書 2 件 : Report of the activities carried out in 2008 by NRICP, Tokyo (UNESCO Japanese Funds-in-Trust Project Preservation of the Buddhist Monastery of Ajina Tapa, Tajikistan) (①) 『タジキスタン、アジナ・テパ仏教寺院の保存事業—2008 年度の成果—』第 16 回西アジア発掘調査報告会、発表および西アジア発掘報告集、2009. 03. 15 (②)			
【受託経費】 9,881USD (間接経費 15% 含む)			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-27

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-1

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業 ((2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】 二神葉子、田代亜紀子、井上和人 (奈良文化財研究所)			
【年度実績概要】 タンロン皇城遺跡は、平成 14 年 10 月にハノイの中心部で発見された。1000 年以上にわたって政治の中心地であったと考えられ、ベトナムだけでなく日本を含む周辺諸国の歴史学・考古学研究上もきわめて重要な遺跡である。この遺跡の保存に関して、ベトナム政府からの要請に基づき、ベトナム側と日本の協力体制を築きながら遺跡の包括的保存修復・整備を実施していくため、2007 年 3 月に日越合同専門委員会が設置された。これ以降、二国間協力体制のもとに専門家派遣が実施されてきた。 本事業では特に、平成 18 年度草の根文化無償資金協力によりベトナムに供与されたタンロン皇城遺跡の考古学的調査用機材を有効に活用し、また、当該遺跡の適切な考古学的解釈を可能とするため、平成 20 年 5 月 8 日～17 日、現地に専門家を派遣して研修を行った。具体的には、昨年度までに実施した日本側による考古測量研修の成果をふまえてベトナム側がこれまでに作成した遺構実測図をもとに、検出遺構の解析作業を実施し、当該遺跡の調査に携わっているベトナム側若手研究者に対して、遺構分析の手法、および作業の成果に関する研修を実施した。また、研修の効果的な進展と、成果の共有を目的として、前回・今回の委託事業での遺構分析研修の成果をまとめた報告書をベトナム語へ翻訳した。報告書の翻訳は、文化財保存の研修での通訳も務めたハノイ国家大学のベトナム人日本研究者が行い、専門用語に関する監修を、日本人のベトナム考古学研究者が行うことで、正確な内容の伝達に努めた。報告書は図面とともに、ベトナム側カウンターパートであるタンロン皇城遺跡発掘調査の責任者に渡され、今後彼らがまとめる調査報告書に内容が反映されることとなる。さらに、日本側関係者間での情報共有を図るため、図面を除く本事業および前回の委託事業で行った遺構分析の成果と、ベトナム語版の成果報告、および事業報告をまとめた報告書を作成した。			
【実績値】 報告書「文化庁委託 タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業 報告」 08.07			
【受託経費】 878,163 円			



タンロン皇城遺跡での遺構分析研修

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-28

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-2

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	タンロン皇城遺跡の保存に係る専門家派遣 ((2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】 清水真一、友田正彦（以上、文化遺産国際協力センター）、青木繁夫、田代亜紀子（文化遺産国際協力コンソーシアム）、井上和人（奈良文化財研究所）、上野邦一（奈良女子大学）			
【年度実績概要】 タンロン皇城遺跡は、平成 14 年 10 月にハノイの国会議事堂建設予定地で発見された。その後、日越両政府の合意のもと日越両専門家による協力体制が築かれつつある。本事業は、考古・建築および保存科学の各分野専門家を現地に派遣し、ベトナム側専門家や遺跡保存センター、社会科学院考古研究所の関係者等との協議を通じて、従来日本が行ってきた同遺跡に関する協力の成果を総括するとともに、ユネスコ信託基金事業等を通じた今後の支援の方向性につき双方の認識を共有することを目的とする。 考古分野の支援としては、ホアンジウ 18 番地遺跡における出土遺構の再精査が既に大きな成果を挙げてきたが、今回も D2/3 と呼ばれる発掘区を対象に遺構の分析・検討作業を実施した。同時に、講習を通じて、平城京、藤原京等における日本の長年の経験に基づく複雑な重層的都城遺構の調査手法を、考古学院スタッフに技術移転した。ホアンジウ 18 番地遺跡の出土遺構については、その緊急的な保存処置および将来的な展示方法についての検討が急務であり、遺構現地で継続している環境計測用の日本政府供与機材について現状確認と記録データ採取を行った。また、考古学院若手スタッフに対する保存科学分野の基礎的研修も行った。 首都ハノイの中心部に位置するこの遺跡においては、発展する都市環境のなかで考古学的遺跡をどのようにに保存活用すべきかが課題であり、我が国が従来蓄積してきた都城研究の成果や埋蔵遺構保存活用の取り組み等を紹介することは大きな意義がある。本事業では、タンロン皇城遺跡に関する包括的かつ広域的な保存管理計画の策定に向けて、今回協議を通じて、その基本的方向性を提示することができた。			
【実績値】 報告書『タンロン皇城遺跡保存に関する専門家派遣 報告』 09.03			
【受託経費】 864,800 円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-29

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-3

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業 ((2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】 豊島久乃、田代亜紀子、小角由子、谷口 仁、土居香菜子 (文化遺産国際協力センター) 青木繁夫 (客員研究員)			
【年度実績概要】 文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を計 14 回、専門家会合を計 3 回開催すると共に、会員間の情報共有を促進するための場として研究会を 2 回開催した。コンソーシアム活動を広報するために、1 月には、文化庁、朝日新聞社と共催で、一般市民向けの公開シンポジウムを行ったほか、国際協力事業を紹介するパンフレットの作成、公式ウェブサイトのデータ追加を行った。さらに、モンゴル、ベトナムへの調査団等派遣支援を行ったほか、諸国国際協力体制調査としてオーストラリアおよび欧州 3 ヶ国での聞き取り調査を実施した。			
I. コンソーシアムの企画・運営 - 運営委員会を 2 回開催して、活動方針等を協議したほか、3 月には研究会と併せて総会を開催した。 - 国際シンポジウム「私の文化遺産再発見」を開催した。 - 企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会を計 14 回開催した。 - モンゴル専門家会合を 2 回、イエメンに関する勉強会を 1 回開催した。 - 広報活動のため、パンフレット作成や、一般向けウェブサイトのデータ追加を行った。 II. 情報共有と情報発信 - 会員専用コミュニティ・サイトを改修し、より会員のニーズや検索要件にマッチする機能を追加した。 - 研究会「文化遺産保全の国際動向アップデート ワークショップ」、「経済開発協力と文化遺産国際協力」を開催した。 - 報告書『モンゴル国 ヘンティ県所在碑文調査報告書』を冊子にまとめ公開した。 - 報告書『リビング・ヘリテージの国際協力 - 町並み保存の現在と未来 -』を公開した。 - 先進国の国際協力体制調査のため、豪州およびドイツ、スウェーデン、ノルウェーにて調査を実施した。 III. 文化遺産国際協力に関すること - モンゴル政府からの要請に基づき、ヘンティ県所在の碑文に関する保存上狭長さを行った。 - イエメン政府からの要請に基づき、2008 年 10 月に豪雨による洪水の被害を受けたイエメン シバームおよびその周辺の被害状況調査を行った。			
【実績値】 運営委員会の開催：2 回、総会の開催：1 回 国際シンポジウムの開催：1 回 分科会の開催： 4 分科会(企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東・中央アジア分科会) 合計 14 回 専門家会議の開催： 合計 3 回 研究会の開催 2 回 諸国国際協力体制調査実施数： 4 カ国 (豪州、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー) (成果物ドキュメント名) ①「協力相手国調査 モンゴル (2008 年 2 月調査報告書)」 (2009 年 3 月、200 部) ②「協力相手国調査 モンゴル モンゴル ヘンティ県遺跡状況調査 報告書」 (2009 年 3 月、100 部) ③「文化遺産国際協力事業紹介」 (2009 年 3 月 1000 部) ④「Japan's International Cooperation in Heritage Conservation」 (2009 年 3 月 500 部)			
【受託経費】 48,000 千円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-30

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-4

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 ((2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
【スタッフ】 (1)インドネシア：朽津信明、二神葉子、秋枝ユミイザベル、田代亜紀子、森井順之（修復技術部） (2)モンゴル：二神葉子、豊島久乃、秋枝ユミイザベル、鈴木規夫（所長）、宮田繁幸（無形文化遺産部） (3)中央アジア：山内和也、島津美子、邊牟木尚美、松岡秋子、宇野朋子、影山悦子（以上、文化遺産国際協力センター）、増田久美（東京藝術大学）、谷口陽子（筑波大学）、大橋拓子、エミリー・シェクルン、ステファニー・ボガン、アントニオ・イアッカリーノ（以上、保存修復家） (4)インド：山内和也、宇野朋子、鈴木 環、島津美子（以上、文化遺産国際協力センター）、森本 晋（奈良文化財研究所）、福山泰子（中部大学）、上原永子（名古屋大学）、佐々木淑美（筑波大学）、大橋拓子、田川新一朗（以上、保存修復家）、檜山智美（東京大学） (5)タイ：○宮田繁幸、星野 紘、上野智子（以上、無形文化遺産部）			
【年度実績概要】 我が国と長期的な関係の構築が望ましいと考えられる外国のしかるべき機関に対し日本国内の機関が行う人材育成・交流事業について、我が国の文化遺産保護への積極的な国際貢献を行うことを業務の目的とする。本業務の項目は下記の5項目である。 (1)インドネシア文化観光局ボロブドゥール遺跡保存研究所との拠点交流事業：平成20年10月にインドネシア側の専門家を招へいし、日光、北海道フゴッペ洞窟等での現地調査および講演会を行った。また、平成21年2月にインドネシアを訪れ、ボロブドゥール遺跡での現地調査を行うとともに、日本とインドネシアのモニタリング事例に関するワークショップを開催した。 (2)モンゴル教育・文化・科学省およびモンゴル国立文化遺産センターとの拠点交流事業：平成20年6月に同省との事前協議を行い、アマルバヤスガラント寺院を視察した。同年9月9日には、教育・文化・科学省文化芸術局の間で人材育成と交流に関する合意書と覚書を締結し、10日・11日にウランバートルで日本とモンゴルの文化遺産の保護制度に関するワークショップを開催した。 (3)中央アジア諸国における文化遺産保護に関する拠点交流事業：7月、8月、11月にミッションを派遣し、タジキスタン国立古物博物館所蔵の壁画片の保存修復作業を現地の研修生とともにに行った。1次・2次ミッションで壁画片の写真撮影、状態調査、クリーニングテスト、保管方法の検討を行い、3次ミッションでは、2点の断片を選んで本格的な修復作業を開始した。 (4)インド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業：11月21日にインド考古局デリー本部において、インド考古局との共同調査の実施に正式に合意した。これにより平成21年2月に第1次ミッションを派遣し、壁画の状態調査を開始した。 (5)タイ王国文化教育省国家文化委員会事務局（ONCC）との拠点交流事業：平成20年6月、8月に今年度の交流実施についてONCCとの協議を行ったが、その後タイの政局混乱による状況変化に伴い、10月、平成21年1月と再度協議を重ねた。それに基づき、3月2日から6日に、タイ東北部ノンブアランプー県及びバンコク近郊で、民俗芸能、工芸技術、保存技術等の無形文化遺産保護の現状調査を実施した。			
【実績値】 報告書6件（①～⑥） (1)①インドネシア文化観光省ボロブドゥール遺跡保存研究所との研究交流業務報告書（2008年度） (2)②報告書 日本およびモンゴルの文化財保護に関するワークショップ ③ семинар Монгол Японы соёлын өвийн хамгаалалт 【上記報告書のモンゴル語版】 (3)④「東京文化財研究所と中央アジア諸国における文化財保護に関する拠点交流事業」タジキスタン国立古物博物館が所蔵する壁画片の修復2008年度（第1次、2次、3次、4次ミッション）2008年度業務報告書 ⑤ワークショップ「中央アジア出土壁画の保存修復」 (4)⑥「東京文化財研究所とインド考古局との壁画保存に関する拠点交流事業」アジャンター壁画の保存修復に関する調査研究事業2008年度業務報告書			
【受託経費】 59,419 千円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-31

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-5

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム ((2)ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田 健
【スタッフ】 清水真一（文化遺産国際協力センター）			
【年度実績概要】 本事業は、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の依頼により、中国文化遺産研究院との共同で、2006-2010年の5年間で、シルクロード沿線の文化財保護修復技術のレベルを引き上げることを目的として、新疆、青海、寧夏、甘肅、陝西、河南の6省・自治区からの研修生を対象に、土遺跡、古建築、考古現場、陶磁金属、壁画、紙類、紡織品の保護修復および博物館技術の8項目の専門分野について、トレーニングを行うものである。 1) 古建築保護修復専攻 期間：3カ月半（4月3日～7月11日）、研修員の人数：12名 古建築保護専攻は2008年度から連続2年で同じメンバーが参加して実施される。1年目に理論講座と各種調査の実習、保護修復計画の作成を研修し、2年目に参加する修復実習作業のための基礎を身につけることを目的にしている。日中両国の講師による授業が行われ、前半の理論講座には5名、後半の故宮紫禁城慶寿堂第三院での現場実習には5名の専門家をそれぞれ日本から派遣した。 2) 土遺跡保護専攻 期間：3カ月（4月16日～7月13日）、研修生の人数：13名 土遺跡保護専攻は2006年度から連続3年で同じメンバーが参加して実施された。最終年となる今年度は、甘肅省瓜州市郊外にある踏実大墓門闕について現場実習による修復作業を実施、完成し、同時に3年間の理論・実践に及ぶ研修内容を集大成し、報告書を作成した。日本からは途中2名の講師が現地へ赴き、修復結果についての評価と研修生との討論を行った。10月31日、3年間の全日程を終了した。 3) 2009年度古建築保護専攻現場実習地の視察 2月28日から3月3日の日程で、財団法人文化財建造物保存技術協会の近藤光雄事業部長を青海省西寧の塔爾寺へ派遣し、2009年度古建築コースの現場実習地を視察させ、カリキュラム作成のための意見を求めた。 4) 契約変更 2008年来世界を襲っている経済危機の影響で、本事業の資金提供者である日本サムスン社から財団へ資金の調達が予定通りには行かないとの予想から、資金の減額についての申し入れがあった。これを承け、財団と当研究所が協議し、来年度以降の経費節約について検討し、当研究所使用分の金額についての契約変更を行った。このため本年度経費から1,980,000円を財団へ返却、来年度以降の使用分へ充当した。 5) 12月6日BS朝日21:00～「よみがえれ！シルクロードの輝き/サムスン・シルクロード文化財保護フェローシップ特別番組」で本プログラムを紹介した。			
【実績値】 古建築保護修復専攻 期間：3カ月半（4月3日～7月11日）、研修員の人数：12名 土遺跡保護専攻 期間：3カ月（4月16日～7月13日）、研修生の人数：13名			
【受託経費】 7,988,100円（うち間接経費727,100円） ただし、1,980,000円を返却。			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-32

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-6

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	ユネスコ／日本信託基金 イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト ((2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域研究室長 山内和也
【スタッフ】 山内和也、有村 誠、宇野朋子、影山悦子、島津美子、鈴木 環、辺牟木尚美（以上、文化遺産国際協力センター）、青木繁夫、谷口陽子、西山伸一、犬竹 和（以上、客員研究員）、高妻洋成、肥塚隆保、降幡順子、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、西尾太加二、大森信宏（以上、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）			
【年度実績概要】 当事業は2005年度に開始し、本年度で4年目となる。本年度は、イラク国立博物館より中央修復室長のブタイナー・M・アブドゥルフセイ氏、修復家のタームル・R・アブドゥラー氏の2名の保存修復専門家を招へいた。 2008年7月1日から12月10日の約半年間にわたり、主に木製品の保存修復研修とそれに関連する保存修復技術の習得のための実習を行った。 まず、東京文化財研究所において、3週間の日本語研修とノートパソコンを使った書類の作成、パソコン、デジカメの使い方についての講習を行った。7月末から9月末までの2ヶ月にわたり、文化財保存の基礎的な講義、木製品の保存修復に係る講義と木製品の保存修復実習（写真）を行なった。保存修復実習では、フェルケール博物館より18世紀頃の船簞笥を修復教材として借用し、保存修復の方針決定、保存修復作業、修理報告書の作成までの一連の作業を実施した。10月中旬に修復が完了した船簞笥をフェルケール博物館へ返却した。 10月は、静岡県埋蔵文化財調査研究所において、水浸木材の保存と保存修復のための研修を行った。水浸木材の保存のための基礎的な講義、木材の保存と劣化に関する基礎的な講義、脆弱な水浸木材を遺跡から取り上げる実習、木材の同定のためのプレバラー作成実習、その他保存修復に関わる作業について研修した。その後、九州国立博物館において保存修復や材料分析のための最新技術の見学、博物館での文化財の管理システムについての見学などを行った。 11月は、奈良文化財研究所において、主に金属器の保存修復について研修を行った。イラク国立博物館の修復研究所に、2005年3月に供与された機材と同種の機材を使い、劣化状態の分析、材質調査、保存修復まで、一連の作業について実習を行った。 最後に、東京文化財研究所においてレポートの作成、成果の発表を行い、研修を終了した。両研修生ともに、研修に対して非常に意欲的に取り組んでいた。自国に戻り、得られた技術をイラク国立博物館や地方の博物館のスタッフへ伝え、また、若手修復家を研修することに役立ててくれることを願う。			
【実績値】 報告3件：Training Programme for the Conservation and the Use of Conservation Equipment UNESCO/Japanese Funds-in-Trust Project, "Rehabilitation of the Conservation Laboratories at the Iraq Museum in Baghdad" 報告書（英語）(①) フェルケール博物館所蔵 船簞笥修復報告書（日本語）(②) A Report on the restoration of the wooden cabinet (FUNA-DANSU) 報告書（英語）(③) 修復1件：フェルケール博物館所蔵 船簞笥の保存修復			
【受託経費】 95,000USD			



船簞笥の保存修復実習

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-33

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-7

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	四川大地震文化財復興支援に関する現地調査 ((2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田 健
【スタッフ】 清水真一 (文化遺産国際協力センター)			
【年度実績概要】 1) 調査の目的 5月12日、中国四川省で汶川県を震源とするマグニチュード8の地震が発生し、震源地を中心に建物の倒壊、山岳の崩落等によって多数の死傷者が出る大災害となった。長い歴史があり、多くの文化財を有する四川省では、文化財にも重大な被害が出た。日本政府は、地震発生直後の人命救助隊の派遣に引き続いて、各省庁から実施可能な項目をリストアップした「支援パッケージ」を中国政府に対して提出した。6月末までにその回答が戻り、文化庁が提出した「文化財復興支援のための日中専門家交流」を実施することになった。今回の調査は、文化庁の委託を受けた東京文化財研究所が、今後の日本による文化財復興支援実施のため現状を把握し、現地文化財保護部門の担当者との意見交換を行って、本年度に実施する具体的な支援活動計画作成のための情報収集を行うことが目的である。 2) 調査期間 9月25日(木)～9月30日(火) 3) 調査人員 清水真一 (東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長)、岡田健 (同 保存計画研究室長) 脇山佳奈 (通訳：四川大学留学生) 4) 調査日程 9月26日 江油県雲岩寺、安県文星塔、安県開禧寺 9月27日 什邡龍居寺、三星堆博物館 視察後、張耀輝氏(Mr)(三星堆博物館副館長/広漢市文物局長)、陳修元氏(Mr)(広漢市文物局副局長)、楊洋氏(Mr)(広漢市文物局副局長/文物遺産部長)と会談。 9月28日 金沙遺址博物館 視察後、王毅氏(Mr)(成都金沙遺址博物館長/成都博物院院長)、朱章義氏(Mr)(成都金沙遺址博物館副館長)、朱小南(Mr)(四川省文物管理局文物保護處長)、李蓓氏、郎俊彦氏と会議。 5) 結果 視察と三星堆博物館、金沙博物館で実施した専門家同士の話し合いを通じて、以下の方向性が確認された。 i 日本の専門家10名以内が四川省を訪れ、文化財の地震対策をテーマとした研究会を行い、専門家同士の交流を図る。 ii 内容としては建造物、博物館収蔵品を考える。 iii 時期は来年の春節明けが相応しい。(春節は1月26日) 6) 文化庁への報告とその後の展開 以上の結果を文化庁に報告した。文化庁はこれを承け、専門家派遣による建造物、博物館収蔵品をテーマとしたワークショップを開催することを決定した。その後文化庁から受託機関の公募があり、当研究所が応募して担当することが決まった。(事業の詳細は49-8を参照)			
【実績値】			
【受託経費】 834,555円 (うち間接経費 108,855円)			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-34

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No50-8

中期計画の項目	5 文化財の保存・修復に関する国際協力の推進		
【事業名称】	四川震災復興に係る文化財協力（専門家交流）事業（（2）ア）		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水 真一
【スタッフ】 清水真一、岡田 健、友田正彦、豊島久乃（以上、文化遺産国際協力センター）、和田 浩（東京国立博物館）、村上裕道（兵庫県教育委員会）、中澤重一（中澤技術士事務所）、林 章二（清水建設株式会社技術研究所）小嶋はるか（財団法人文化財建造物保存技術協会）、包慕萍（東京大学生産技術研究所＝通訳）、胡惠琴（北京工業大学建築與城市規劃学院＝通訳）、李逸定（上海桐井建材有限公司＝通訳）			
【年度実績概要】 昨年5月、四川省西部を震源として発生した大地震により、当地の文化財にも多くの被害が発生した。その復興に向けて、既に中国各地より多くの専門家や技術者が派遣され、担当する現場で作業を開始している。この機会をとらえて、これらの関係者と日本から派遣する専門家が一堂に会するワークショップを平成21年2月9日～13日に中国成都で開催した。 文化庁と中国国家文物局が共催したワークショップには、日本において文化財分野の地震対策に実際に関わってきた建築史・保存修復・建築構造・基礎地盤工学・施工技術・博物館学・文化財行政といった各分野の専門家を派遣した。同時に派遣された文化庁文化財鑑査官および震災対策部門主任調査官とともに、阪神淡路大震災以来文化財の地震対策に取り組んできた日本の知見や経験を具体的事例に即して紹介し、あわせて今回震災において浮き彫りとなった様々な課題と今後の中国における文化財の地震対策について中国側関係者と活発な意見交換等を行った。 また、セッションの間には、今回地震で被災し、目下、復興作業が行われている現場を日中専門家が合同で訪問し、実際に現場が直面している問題点等について意見を交わすことで、支援の実効性および即効性をより高めることができた。 なお、1月27日には、日本側講師全員が集まり、各発表者間の内容調整等をおこなう事前会議を開催した。さらに、ワークショップ開催後には、中国側発表を含む講義資料や、質疑応答等の内容、視察概要などをまとめた報告書を500部作成した。今後、文化財の地震対策に関する各種支援等においても教材として有効に活用されることが期待できる。			
【実績値】 報告書『文化財建造物の地震対策に関する日中専門家ワークショップ報告書』2009.3			
【受託経費】 8,384,995 円			

【受託】

施設名

東京文化財研究所

処理番号

8000-35

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No80-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	関西大学博物館所蔵重要文化財高坏形土器の復元修理 ((1))		
【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	副センター長 川野邊 渉
【スタッフ】 北野信彦（保存修復科学センター）、犬竹 和（修復家）			
【年度実績概要】 本事業で復元修理を行った高坏土器は、大正8年に大阪府藤井寺市国府遺跡から出土した資料である。同遺跡から出土した縄文鉢形土器（平成18年度受託研究にて修復完了）、籠型土器（平成19年度受託研究にて修復完了）などと共に重要文化財に指定されている。本資料も、近年にいたって、以前の復元で使用された修復材料の劣化が認められ、再修復を要する状態にあった。使用されていた石膏や接着剤は、経年変化による劣化が著しく、本資料の取り扱いにも支障をきたすような状態であった。そこで、平成18年度、平成19年度受託研究に引き続き、今回は本資料の再修復を行うこととなった。今回の再修復でも土器が展示や学術研究に活用されることを目的とし、石膏に代わる土器修復材料であり、質感・耐久性などにすぐれた補修用擬土を使用して修復した。			
概要 ◇修復対象 高坏形土器 ◇修復概要 1) 解体およびクリーニング・・・劣化した石膏は超音波メスで除去。接着剤は有機溶剤を使用して除去し解体した。 2) 土器の強化・・・劣化して脆弱になった土器破断面をアクリル樹脂で強化した。 3) 接合・・・アクリル樹脂を使用して破片を接合した。 4) 復元・・・補修用擬土を充填し、常温で乾燥後、整形し文様を施した。55℃の定温乾燥機に入れ樹脂を硬化させた。			
【実績値】 受託事業報告書 1件 本事業は関西大学から依頼			
【受託経費】 1,365 千円			

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-36

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No81-1

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	徳島市観音寺遺跡(阿波国府推定地)出土木簡の総合的研究(受託)((1))		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 渡辺晃宏、馬場基、市大樹、山本崇、浅野啓介[以上、都城発掘調査部]、中村一郎[企画調整部]、高妻洋成[埋蔵文化財センター]、大橋育順[(財)徳島県埋蔵文化財センター]、和田萃[京都教育大学名誉教授]			
【年度実績概要】 平成17年度以来実施している観音寺遺跡等出土木簡の総合的研究の第Ⅱ期の第2年度目。今年度は、当初予定の60点に加え、平成19年度出土の11点を含めた計71点の木簡について、引き続き最新の機器を用いた再解読を行ってその歴史的な評価を確定し、また木簡ごとに最適な手法を選択した上で、科学的な保存処理を実施した。 ① 水漬け状態における積文の再検討を、最新鋭の赤外線テレビカメラ装置を用いて実施し、積文案を作成した。積読検討会は、これまで観音寺遺跡・敷地遺跡出土木簡の積読に携わってこられた京都教育大学名誉教授の和田萃氏にもご参加いただき、従来の積読を踏まえて実施した。 ② 同上について、4×5モノクロ写真(ネガ)、4×5カラー写真(ポジ)、デジタルカメラによる赤外線撮影3種類の撮影を行った。原版は、奈文研と(財)徳島県埋蔵文化財センターの双方に保管している。 ③ ①②の作業終了後、埋蔵文化財センター保存修復工学研究室において科学的な保存処理を実施した。保存処理方法は、木簡の状況に応じて真空凍結乾燥法と高級アルコール法の適切な方を選択した。 ④ 保存処理後、①と同じ要領で、再度積読検討会を実施し、最終的に積文を確定した。 ⑤ 保存処理後の状態について、②と同じ要領で写真撮影を実施した。 以上の調査の結果、今年度対象の木簡についても従来の積読に加えて、さらに読みを深めることができた。また、保存処理によってさらに墨痕が鮮明になる場合があり、最新の機器を使用したことや、これまで奈文研に於ける永年にわたる木簡解読技術の蓄積ともあいまって、従来明らかでなかった文字を解読することができ、従来の積文を訂正すべき部分があることが明らかになった。 具体的な調査成果については、委託主体である(財)徳島県埋蔵文化財センターに業務完了報告書の形で報告した。前年度の成果と合わせて同センターから報告書が刊行される予定である。 観音寺遺跡等出土の個々の木簡の積読を確定してその歴史的価値を明らかにする一方、貴重な資料を確実に後世に残すために最善の科学的保存処理を実施することができた。4箇年に及んだ受託研究によって、観音寺遺跡出土木簡が、評制下を含む阿波国府関連の遺物であることが明確になるだけでなく、名方郡家に関わる木簡の存在も判明し、時間的・空間的な広がりをもつ全国的に見ても有数の木簡群であることを明らかにできた。 物忌礼			
【実績値】 解読木簡点数71点、水漬け状態の写真撮影モノクロ71点・カラー71点・赤外線デジタル71点、保存処理後の写真撮影モノクロ71点・カラー71点・赤外線デジタル71点 木簡の科学的保存処理71点			
【受託経費】 1,391千円			



【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-37

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No81-2

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	祢布ヶ森遺跡出土木簡の保存処理等総合的研究(受託)((1))		
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)	【事業責任者】	副所長 山崎信二
【スタッフ】 渡辺晃宏、馬場基、市大樹、山本崇、浅野啓介[以上、都城発掘調査部]、中村一郎[企画調整部]、高妻洋成[埋蔵文化財センター]、加賀見省一、前岡孝彰[以上、豊岡市但馬国府・国分寺館]			
【年度実績概要】 但馬国府推定地である兵庫県豊岡市所在の祢布ヶ森遺跡から平成20年春に出土した木簡約200点について、科学的な保存処理を実施した上で釈読を確定し、その歴史的な意義を明らかにするための事業である。祢布ヶ森遺跡出土の個々の木簡の釈読を確定してその歴史的価値を明らかにする一方貴重な資料を確実に後世に残すために最善の科学的保存処理を実施することができた。また、保存処理前後の二度にわたってカラー・モノクロ・赤外線の種類の写真撮影を行い、最新の機器と蓄積されたノウハウによって釈読作業を行った。 その結果、『詩経』の語句が習書された木簡や「五百井女王」の名の書かれた木簡、城崎郡からの「御調料」の茜の荷札をはじめとする、国府の行政事務や文化環境を彷彿とさせる豊かな内容が読みとれ、全国有数の国府遺跡出土木簡群であることを明確にできた。 ① 水漬け状態における釈文の検討を、最新鋭の赤外線テレビカメラ装置を用いて実施し釈文案を作成 ② 同上について、4×5モノクロ写真(ネガ)、4×5カラー写真(ポジ)、デジタルカメラによる赤外線撮影3種類の撮影を行った。原版は、奈文研と但馬国府国分寺館の双方に保管している。 ③ ①②の作業終了後、埋蔵文化財センター保存修復工学研究室において科学的な保存処理を実施した。保存処理方法は、木簡の状況に応じて真空凍結乾燥法と高級アルコール法の適切な方を選択した。 ④ 保存処理後、①と同じ要領で、再度釈読検討会を実施し、最終的に釈文を確定した。 ⑤ 保存処理後の状態について、②と同じ要領で写真撮影を実施した。 以上の調査の結果、出土からあまり日を置かずに良好な状態で釈読を確定することができ、また早めに保存処理を行うことができた。今回の木簡群には多数(約125点)の削屑が含まれているが、平城宮跡出土木簡で試みている真空凍結乾燥法によって、良好な状態で処理を施すことができた。受託研究による多量の削屑の科学的保存処理は、今回が初めてである。 具体的な調査成果については、委託主体である但馬国府国分寺館に業務完了報告書の形で報告した。今後先方と相談の上、研究成果の公表方法を検討していきたいと考える。			
【実績値】 解読木簡点数約200点、 水漬け状態の写真撮影モノクロ約200点・カラー約200点・赤外線デジタル約200点、 保存処理後の写真撮影モノクロ約200点・カラー約200点・赤外線デジタル約200点 木簡の科学的保存処理約200点(うち削屑約125点)			
【受託経費】 1,603千円			



詩経木簡赤外画像

【受託】

施設名

奈良文化財研究所

処理番号

8000-38

(様式3)

業務実績書(受託事業)

研究所 No81-3

中期計画の項目	7 地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上		
【事業名称】	「発掘調査のてびき」作成に係わる業務(受託)((1))		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	文化遺産部長 山中敏史
【スタッフ】 小林謙一[企画調整部]、小澤毅、金田明大[以上、埋蔵文化財センター]、松村恵司、深澤芳樹[以上、都城発掘調査部]ほか			
【年度実績概要】 『発掘調査の手引き』は1966年に文化庁文化財保護部から刊行され、数多く版を重ねてきたが、このたび約40年ぶりに全面改訂し、あらたな『発掘調査のてびき』を作成することとなった。前回と同様、文化庁の事業として行い、まず『集落遺跡・調査編』と『整理・報告書編』の2冊を同時に刊行することが決定している。当研究所は、文化庁の委託を受けて、上記2冊の作成作業の事務局と実際の編集作業全般を担当する。 本年度は、7月・11月・1月にそれぞれ2日間をあてて、奈良で3回の作成作業部会を開催した。前年度に引き続き、文化庁委員、地方公共団体委員、奈良文化財研究所委員が一堂に会して、『集落遺跡・調査編』及び『整理・報告書編』の構成と内容を検討した。また、これらの作成作業部会の検討成果と事務局によるそのとりまとめを受けて、3月に東京で作成委員会を開催し、本年度の事業報告を行うとともに、それに対する指導と助言を受けた。 『集落遺跡・調査編』は、構成や内容について細部の修正作業を進め、編集とレイアウトを終了した。また、『整理・報告書編』は、原稿を集約して構成や内容に関する調整を行い、編集とレイアウトを終えたが、刊行までには、なお両者の内容の擦り合わせと修正作業が必要である。			
【実績値】 作成作業部会開催件数：3回 作成委員会開催件数：1回 実績報告書：1件			
【受託経費】 6,295千円			